



財団法人日本医療機能評価機構認定病院  
DPC 特定病院群  
地域医療支援病院  
地域がん診療連携拠点病院  
臨床研修指定病院

# ふれあい



## 【もくじ】

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) に関する当院の取り組み	院長 宮田 剛・・・2
当院での腎移植実施について	腎臓・リウマチ科医長 中村 祐貴・・・3
ヘリポート開設から1年	救急医療部長 須原 誠・・・4、5
糖尿病看護認定看護師の役割	看護部次長 清水 幸代・・・4、5
入退院支援センターと診断書コーナーの移転について	糖尿病看護認定看護師 高橋 雅代・・・6
新臨床研修医の紹介	医事経営課長 高橋 秀樹・・・6
上田中学校による中央病院応援プロジェクトに対する感謝状贈呈式	令和2年度臨床研修医 17名・・・7
編集後記	総務課長 乱場 定吉・・・8
	広報委員長(小児外科長) 島岡 理・・・8

## 【行動指針】

1. 良質な医療の提供
2. 次世代医療人の育成
3. 地域医療への貢献
4. 救急医療の充実
5. 災害医療の体制整備
6. 健全で効率的な病院運営
7. 魅力ある職場環境整備

## 基本理念

高度急性期医療を推進する県民に信頼される親切であたたかい病院

※広報誌「ふれあい」は1,800部を作成し、県民、連携医療機関、行政機関等に岩手県立中央病院の情報をお届けしています。

## 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に 関する当院の取り組み

院長 宮田 剛



2019年12月に中国武漢市から原因不明のウイルス性肺炎が報告され、2020年2月より日本でも感染が認められるようになる中、2月28日に当院では新型コロナウイルス感染症対策本部を立ち上げました。

岩手県内の協議により、当院は、これまで同様の救急医療体制やがんなどの高度専門医療を維持しつつ、重症呼吸不全や多臓器不全、あるいは感染妊婦の分娩など、命に係わる感染者の治療を担うことになりました。軽症者の治療は他機関にお任せし、特に集中治療室をはじめとした各部門や手術室、診療科で準備を進めました。

職員に感染者が出た場合には病院機能を停止せざるを得なくなります。部署によっては、部門職員全体が濃厚感染者になる共倒れを防ぐために、同時に勤務する医師・看護師数を減らし、手術や検査、外来機能も縮小する特別体制を整えました。このため再来患者さんには電話再診、処方を行い、緊急性のない手術や検査をしばらく見合わせる方針としたため、ご迷惑をおかけしたことをご容赦いただきたく思います。

6月に入り、一旦世の中の緩和ムードから当院でも様々な体制を緩和させましたが、7月に入って再度急激な感染者の増加が報告され、ついに7月29日に岩手県でも感染者が確認されました。4月10日に鳥取県で感染者が出てから7月28日まで岩手県は感染ゼロ独走を続けてまいりましたが、長い準備期間を頂いたと解釈しております。これから準備した対策を粛々と進めてまいります。

今回のような未知の感染症に対しては、社会に不安が募り、この不安によって買い占めや検査集中、一部地域での医療崩壊などを引き起こしました。病院職員においてもこの不安がないわけではありません。しかしプロとしての専門知識と装備、体制整備によってこれを解消し、地域医療の最後の砦として、十分な感染対策を行いながら自信を持って職務に専念できるよう取り組んでまいります。

多くの方々から当院への慰労のお言葉をいただいたことに感謝いたしますとともに、今後ともご理解ご協力のほどよろしくお願いいたします。



## 当院での腎移植実施について

腎臓リウマチ科医長 中村 祐貴

平素より当科の運営に多大なるご支援を賜り心より感謝申し上げます。

当科は、2000年4月に相馬・現統括副院長が当院へ赴任し、2002年に腎臓内科を立ち上げました。2007年4月に中屋・現科長が着任し、当院の透析導入患者は増加の一途を辿りました。その中で、患者さんから当院での腎移植実施を希望する声がたくさん聞かれましたが、長年、希望する患者さんをJCHO 仙台病院や岩手医科大学に紹介してきました。一方で、当科スタッフの当院で腎移植医療を実施したいという思いは徐々に強くなり、当院での腎移植実施を模索していたところ、幸運にも私、中村が2018年4月から1年間、国内の腎移植をリードする名古屋第二赤十字病院移植内科で研修を受ける機会を得ました。2019年4月当院に再赴任後、当院に腎臓病で通院中の患者さんの中に当院での生体腎移植を希望する患者さんが何組かいらっしゃいました。2019年6月に半年後の12月を目標に準備を進め、当科、泌尿器科、消化器外科、麻酔科を中心として院内各部署を超えた腎移植チームを結成しました。また、手術部、病棟、外来部門のメディカルスタッフが名古屋第二赤十字病院で研修を受け、当初の予定通り2019年12月に第一例目の生体腎移植を行うことが出来ました。2例目は2020年2月に行い、2例とも術後の経過は良好です。手術当日には名古屋第二赤十字病院移植外科、岩手医科大学泌尿器科、東北大学先進外科、JCHO 仙台病院移植外科の先生方に応援に来て頂きました。

当院では、腎臓内科医が腎不全患者さんの治療プランニングを腎不全早期からご提案し、腎代替療法として腎移植を選択された方には、周術期から移植後長期にわたる生活の質の維持・改善、移植後合併症への対応、移植後透析再導入への対応など、チームでのサポートを実施して参ります。先行的（透析導入前の）腎移植希望にも対応して参ります。現在腎不全にお悩みの患者さんや維持透析中の患者さんをはじめ、とりあえず腎移植の説明だけでも聞いてみたい方、あるいは腎不全患者さんの腎代替療法に関するご相談・ご紹介をご検討されている先生方がいらっしゃいましたら、当科にて随時ご相談を承ります。当科外来まで、まずはお電話でお気軽にお問合せ頂けますと幸いです。

本県、北東北における腎臓病診療の拠点施設を目指して、また県民の皆様さらに質の高い医療を提供できるよう、これからも努力して参ります。今後とも何卒宜しくお願い致します。



## 糖尿病看護認定看護師の役割

糖尿病看護認定看護師 高橋 雅代

糖尿病看護とは、患者さんを「糖尿病を持ちながら生活する人」と捉え、合併症の発症・悪化を防ぐとともに、その人らしく健やかな生活を継続できるように生涯続くセルフケアや療養生活の支援を行うものです。当院の糖尿病・内分泌内科には年間約500名の糖尿病患者さんが通院されており、癌の治療や合併症の治療、妊娠・出産に伴う血糖調整など様々な状態に応じた糖尿病治療を行っています。

私は現在、糖尿病・内分泌内科外来に勤務しており、外来患者さんはもとより、病棟から依頼を受けた入院患者さんへの療養支援や、インスリン治療に伴う自己注射の手技・血糖測定の手技の獲得に向けた指導などを行っています。その中で「糖尿病療養支援外来」では糖尿病の基礎知識の提供や透析予防に向けた療養のサポート、患者さんや御家族との面談、フットケア（足の合併症発症予防・悪化予防・爪切り等）を実施しております。

中央病院に在籍する糖尿病看護認定看護師は1名ですが、日本糖尿病療養指導士の資格を持つ看護師や管理栄養士をはじめ、糖尿病専門医、薬剤師、臨床検査技師、理学療法士など多職種のスタッフで「糖尿病療養指導チーム」を作り、チームメンバーが一丸となって糖尿病患者さんのサポートを行っています。

患者さんが安心して療養生活を送れるよう支援を行っていきたいと思っています。糖尿病に関するお悩みがありましたらお気軽にご相談ください。

## 「入退院支援センターと診断書コーナーの移転について」

医事経営課長 高橋 秀樹

当院では、患者サービスの充実のために「診断書受付コーナー」を平成20年5月から設置しており、平成30年4月からは、通院から在宅まで切れ目のないケアの提供により、患者の安心と病床適正運用を図ることを目的に「入退院支援センター」を設置しました。

その後、岩手医科大学附属病院の矢中移転等に伴う患者数増に対応するため、一体的な支援で早期の退院が図れるよう、1階の正面玄関前に新しい入退院支援センターを設置し、医事事務室内の配置も連携が取りやすいよう職種毎に整理し、令和2年6月に無事に移転しました。

入退院支援センター及び診断書コーナーが移転したことにより、来院者にも分かりやすく好評を得ており、面談についても以前はパーティションで区切られたスペースで対応していましたが、独立したブースにしたことにより個人情報にも配慮した対応が出来るようになりました。

移転するにあたり事務室付近の工事や、自動入金機・再来受付機の移動などの苦勞もありましたが、素晴らしい入退院支援センターと診断書コーナーになったと思います。

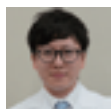
今後も患者サービスの向上に努めて参りたいと思いますので、何卒よろしくお願い申し上げます。



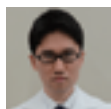
岩手医科大学出身の赤沼利奈と申します。日々新しいことを着実に学び医師としての基礎を築く2年間にできるように努力していきたいと思っております。赤沼 利奈



国試合格の一報を受けてから、あっという間に月日が過ぎたように感じます。医師としては、まだ未熟な部分が多く反省することも多々あります。しかし、患者さんの安心された表情を見て、やりがいを感じることも増えています。今後も初心を忘れず研修を進めていきたいです。瀧野 温子



中央病院1年次研修医の小笠原と申します。盛岡生まれの大宮中、盛岡一高出身です。将来は岩手の医療に従事していこうと思っております。希望科はまだ決まっておきませんが研修医というこの2年間で大切に1人1人の患者さんとしっかり向き合い尽力していきたいと思っております。よろしくお申しあげます。小笠原 慶太



1つ1つの学びを大切にしながら、精一杯頑張りたいと思います。ご指導のほどよろしくお願いいたします。山内 淳志



岩手医科大学出身の岡田伊織と申します。2年間の初期研修では知識、技術だけでなく医師として必要なさまざまなことを多く吸収し、患者さんに寄り添うことのできる医師を目指したいと思っております。まだまだ未熟ではありますが、ご指導よろしくお願いいたします。岡田 伊織



研修をはじめて数か月、少しずつ業務を覚えながら研修をしていますが、積極的に多くのことを学び、研修に励んでいきたいと思っております。皆様からのご指導よろしくお願いいたします。瀧野 貴浩



研修医1年の小池吉彦です。出身は山形で岩手医科大学を卒業しました。将来の希望科は頭頸部外科です。まだまだ未熟者ではありますが、2年間ご指導とご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

小池 吉彦

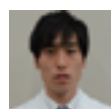


県立中央病院1年次研修医の及川圭と申します。盛岡一高を卒業後、東北大学に進学し再び岩手に戻ってきました。生まれ育ったこの地への恩返しのため医療に貢献していきたいと思っております。まだまだ若輩ですが何卒よろしくお願いいたします。

及川 圭

よろしくお申しあげます

## 1年次研修医の紹介



4月から研修医としてお世話になっている鈴木優樹と申します。研修医として診療科、救急外来で日々多くの症例に触れ精進しております。まだまだ至らぬことが多いですが、多くの経験を積んで頼りになる医師を目指していきたいと思っております。

鈴木 優樹



はじめまして。岩手県立中央病院初期研修医一年次の長谷川喬彦と申します。私は2年間の研修期間で多くのことを吸収し、今後の医療人としての第一歩をしっかりと歩んでいきたいと思っております。将来自分が志望する科のことのみならず多くの科があるつよみを生かして全身を診れる医師を目指し研修していきます。また、チームの一員であることを自覚し、良好なコミュニケーションのもと医療を提供していければと思っております。

長谷川 喬彦



臨床研修が始まり早くも三ヶ月が経とうとしています。日々、自身の至らなさを思い知らされ、反省の絶えない毎日をおすごしています。一方で上級医の先生、二年次の研修医の先生がいかにも優秀であるかを実感し、そのような先生方に囲まれ、底知れぬ知識にいつでもアクセスできることに心から感謝しております。今後ともよろしくお願いいたします。高橋 洵太



はじめまして。1年次研修医関野泰幹です。東北大学を卒業しましてふるさとの盛岡に戻ってまいりました。地域の医療に少しでも貢献できるように日々精進していきます。小学校から大学まで野球部でした。研修医の生活は多忙なことと思いますが部活が培った体力気力を活かしてがんばります。よろしくお願いいたします。関野 泰幹



臨床研修の基本理念にあるプライマリ・ケアの基本的な診療能力を身につけることが当面の目標です。また、岩手県立中央病院という症例数の多く、プロブレムの様々な患者さんを診させて頂くことを通して、多職種との連携や社会常識、地域特有な課題についても念頭におき、有意義な研修にしたいと思っております。

佐藤 慶太



岩手の医療に貢献できるように、真摯に精一杯努力します。よろしくお願いいたします。佐藤 凛太郎



2年間の研修を通じて医師としての土台を築いていけるよう精一杯努力していきたいと思っております。ご指導宜しくお申しあげます。

工藤 梨沙



いつの間にかやらの紫陽花の季節となりました。私たち研修医も病院の中で少しずつ装いを変え、なじみつつある頃かと存じます。個人的にはひとりで判断できることを少しでも増やしたいという目標でアレコレやっているつもりですがままならないことも多いです。秋の山萌える頃には、もう少し熟れた医者になっていることを夢見つつ、今日も病棟に行ってきまーす。

千葉 大介



はじめまして。大阪医科大学出身の山陰浩です。至らぬ点も多いかと思っておりますが、少しでも戦力になれるよう頑張ろうと思っております。ご指導よろしくお願いいたします。

山陰 浩

## 上田中学校による中央病院応援プロジェクトに対する感謝状贈呈式

総務課長 乱場 定吉

令和2年7月21日（火）16:30から1階待合ホールにて、上田中学校の代表生徒2名と教諭2名に来院していただき、「上田中学校による中央病院応援プロジェクトに対する感謝状贈呈式」を行いました。

今回、お隣の上田中学校の生徒さん達が当院の新型コロナウイルス感染症対策に対する深いご理解のもと、「中央病院応援プロジェクト」を立ち上げられ、その一環として、心温まるポスターの寄贈と中学校の西側に30メートル級の横断幕で応援メッセージを届けてくれました。

このポスターと横断幕によってもたらされる来院者・職員の心の癒やしは計り知れません。

医療者として日々この新型コロナウイルス感染症は頭を悩まし、院内感染予防対策にエネルギーを費やす事態ですが、上田中学校の生徒さん達は、我々の奮闘をこの横断幕のような目で見ているというのは、正直言って驚きでした。

中学生が我々をヒーローとして見てくれていることを感じながら日々の仕事をしていきたいと思えます。

上田中学校の生徒の皆さん、大変ありがとうございました。感謝を申し上げます。

※7月20日、有志で結成した看護師一同から上田中学校へ見えるように、4階東病棟の東側窓にお返しのメッセージを掲示させていただきました。



編

集

後

記



大変なことになっています、コロナ禍。Go To Travel やら夜の町クラスターやら今年の言葉大賞がいくつもできそうな文言が並んでいます。この騒動で気になっている事。どうして命をかけてコロナ患者を治療している医療者が家族を含めて誹謗中傷されるのでしょうか。どうしてコロナ検査で陽性患者を検出した医療施設がネットにさらされ廃業にまで追い込まれるのでしょうか。誹謗中傷している人達は自分はコロナに絶対かからないとでも思っているのでしょうか。マスクが個人特定捜しに一役かっている気もします。コロナ対策を立てれば立てるほど、コロナ患者を治療すればするほど経営が悪化するのはいはり政府の無策であると思えます。通常の患者診療もできなくなってしまいます。言いたくはありませんがほんとコロナ憎いですよね。が、治療法のない新規感染症はこのように人類に忍びよってくるのでしょうか。そういう意味では迅速な初動がいかに大切であるか。今後の教訓にしていかなければと思います。初動の欠落、無知？放漫？・・・が悔やまれます。

## お知らせ

## ★健康講座について★

新型コロナウイルス感染拡大防止のためしばらくの間、開催を見合わせます。



岩手県立中央病院  
〒020-0066 岩手県盛岡市上田 1-4-1  
TEL:019-653-1151 FAX:019-653-2528  
<http://www.chuo-hp.jp>

ふれあい No.289 令和2年8月  
岩手県立中央病院 広報委員会

◆委員長 島岡 理

相馬 淳	吉田 学
渡辺 道雄	杉 悠華子
高橋 大輔	多田 淳子
千葉 依吹	子守 理子
坪井 ふみ子	木村 圭汰
藤澤 麻衣子	佐々木 花
千田 達矢	佐々木 幸恵
吉田 奈穂子	

ふれあいはホームページでもご覧頂けます。

[岩手県立中央病院](#) [検索](#)

# ヘリポート開設から1年を迎えて

2019年5月20日 中央病院ヘリポート開所式が行われ、翌21日から正式に運用が開始されました。当院では、これまでも沿岸地域など県内遠隔地域や隣県（青森県、秋田県）から救急傷病者の受け入れを行ってまいりましたが、緊急性が高い場合などはドクターヘリによる搬送も行われてきました。しかし当院にヘリポートがなかったために県警ヘリポート（内丸）や県営球場臨時ヘリポートを経由し、そこから救急車で当院へ搬送してきました。このたび病院に隣接する杜陵高校敷地内にヘリポートが設置されたことによりかなり搬送時間が短縮されることになりました。重症で緊急性が高い傷病者においては大きく予後の改善に寄与することと思われまます。一昨々までの過去3年間の年間ドクターヘリ搬入件数は28、12、23件/年でしたが、利用率が高まったことと相まって、昨年度は39件/年とかなり増加しました。

ヘリ搬送においては、受け入れ病院スタッフがヘリポートまで迎えに行き必要があります。これまでは必要な資器材を持参し、タクシーでヘリポートに向かっていた。交通事情なども考慮しながら時間的余裕をもって病院を出発するために、救急外来スタッフ（医師1名、看護師1名）が手薄になる時間が結構ありましたが、隣接ヘリポートが使用できるようになり、スタッフ欠員時間の大幅な短縮につながっています。当初、ヘリポートと病院救急患者搬入口は公道を利用し約400mでしたが、杜陵高校のご好意によりヘリポートに行くスタッフが高校敷地内を横切ることができるようになりました。迎えに行く動線が半分以下（約170m）になり、ヘリの音が聞こえてからもダッシュ！すれば間に合うことになりました！？（でも、ちゃんと最低でも5分前には到着して受け入れ準備をしているので安心下さい）。

ヘリポート運用においては医師、看護師だけではなく病院事務部門の関わりが不可欠です。通年でヘリポートを使用できるように定期的な保守、点検を行い、冬期間には除雪、融雪管理も必要になります。また搬入要請があると迅速にヘリポートに出向き開錠（使用後は施錠）、エレベーター確認などを行っています。病院関係者だけではなく消防機関や近隣地域の皆様のご理解とご協力により開設から1年間、安全で効果的なヘリポート運用が行われてきました。これからもよろしくお願いたします。

令和2年5月、ヘリポートが盛岡市上田に開設され1年が経過しました。ドクターヘリによる患者受け入れ要請から、当院に搬送されるまでの実際を紹介いたします。

現場搬送においては、傷病者のいる現場が搬送先の病院を判断し搬送。また転院搬送としては病院間搬送があります。救急外来は患者情報の連絡を受けたあと、到着時刻を確認しヘリポートの準備を管財係へ依頼。救急外来の医師、看護師各1名は、緊急対応に必要な物品の入ったバックやモニターを持参し、徒歩でヘリポートへ向かいます。依頼を受けた救急隊は、救急車でヘリポート1階に待機しています。患者情報申し送りは、フライトドクターは医師へ、フライトナースは看護師へ行きます。エレベーターで患者さんと共に降り、約400mを救急車で搬送し当院救急外来へ到着します。その後、救急外来で初期対応します。

今回、ヘリポート開設にあたり、医療スタッフが携帯する薬品類を入れる搬送バックは、最低限必要なものに縮小し変更しました。運用基準は、担当の役割を明確化し、写真を入れわかりやすいように見直しました。病院に隣接する敷地にヘリポートが開設されたことで、緊急度・重症度の高い患者が安全かつ利便性良く搬送されることになりました。しかし住宅地の中でのヘリポート設置は、地域住民の皆様のご理解あってこそ感謝しております。

今後は、通年にわたりヘリポートが使用可能となった事で、地域医療および救急医療充実のために更なる救急業務の効率化が図られると考えます。



清水時代看護師次長



ヘリポートへ出動



救急室の様子



須原誠急医療部長